

第8回 山岸秀豪佐野学園監事
受け継がれゆく創業の精神

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



昭和44（1969）年に学校法人佐野学園が設立されて以来、監事として学校経営を厳しく見守られてきた山岸秀豪氏。佐野きく枝先生の親族にあたる山岸監事は、半世紀以上にわたり、佐野家の人々と接してこられました。組織での経営手法を学ぼうとした佐野公一先生。人の縁を引き寄せる力を持っていたきく枝先生。父との確執を乗り越えながら経営者として成長していった佐野隆治会長。礎を築く佐野学園を見つめてきた山岸監事にお話を聞きました。

僕は昭和6（1931）年に福井県の鯖江市で生まれました。佐野学園の第2代理事長である佐野きく枝先生は、僕の父といとこの間柄で、僕が小学生の低学年の頃からよく我が家に遊びにいらしていました。とても優しい方で、色々なことを教えていただいた。きく枝先生のことが大好きで、「帰らないで！」って、ダダをこねて、靴を隠してしまったこともある。まだ幼かったからね。

きく枝先生のご実家である黒田家と、我が山岸家のつながりが生まれたのは、明治の初期にさかのぼります。黒田家は鯖江の大地主で、田畑を回るのに籠（カゴ）が必要だったくらい広い土地を治めていた。明治10（1877）年に、当主である黒田金右衛門の次男が山岸家の養子となりました。私の祖父です。きく枝先生のお父様の弟ですね。



祖父の写真が残っています。明治34（1901）年に家督相続をしたときの写真だと思いますね。明治時代に鯖江なんて田舎で、なぜ写真が撮影できたのか？ふと気づいたのは、祖父の兄である、きく枝先生のお父様です。お父様は文明開化後に日本へ入ってきたばかりの写真に注目し、敦賀で写真館を興された。当時は相当の財力がなければ、写真業は営めなかったはずですよ。



その頃の日本は、日本海側に外交の拠点があり、敦賀もそのひとつでした。ウラジオストックと航路で結ばれていた敦賀は、外国の文化の入ってくる文明開化の街だったのです。その敦賀で写真館を営んでいたきく枝先生のお父様がいたからこそ、私の祖父の写真がきれいに残っているというわけです。

ただ、残念なことに鯖江の黒田家はなくなってしまった。きく枝先生は早くにお母様を亡くされて、ご兄弟も都会に出られたので、郷里を離れて、学校の先生をしながら病気を患っていたお父様の面倒をずっとみていたと聞いています。ご実家のないきく枝先生やご兄弟は鯖江に帰ってくるときは、いつも我が家を実家のようにして、泊まっていた。きく枝先生と僕の両親は、いとこの間柄でしたが、兄妹のように親しく付き会っていたのです。（1/11）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第8回 山岸秀豪 佐野学園監事
受け継がれゆく創業の精神



「なんだ俺の後輩になるのか？」と、僕を受験の下見に連れて行ってくれた。

14歳、旧制中学のとき、終戦を迎えました。進駐軍が入ってきて、それまでの教育勅語に基づく教育がすべて否定された。戦中までは、男子生徒と女子生徒はできるだけ接触しないよう学校も通学路も分けられていたのが男女共学になりました。それだけ価値観がガラリと変わるのは悲劇だったけれども、一方で希望もあった。戦争の末期には、16、17歳で軍隊に行く者もいた。いつ何時死ぬかも分からない時代に育ってきましたからね。

だから、新しい教育制度が始まり、学生の自治が認められたとき、僕は入学した武生高校で積極的に自治会活動に参加した。生徒会長もやったし、後に上京して入った学生寮でも学生委員長を任された。そんな気持ちがあったから、政治家になるのも悪くないなと思って、中央大学の法学部を受けようと決めた。昭和27（1952）年の冬のことです。

東京・お茶の水の中央大学を受験するのに、上野の上車坂（かみくるまざか）にあった佐野きく枝先生のご自宅に泊めていただきました。喫茶店の千代田苑を開店して間もない頃だったかな。佐野公一先生、そして佐野隆治会長にお会いしたのは、このときが初めてです。公一先生は怖い人だという話を聞いていました。確かに、初めて会ったときは、鋭い人だなあという印象を受けました。

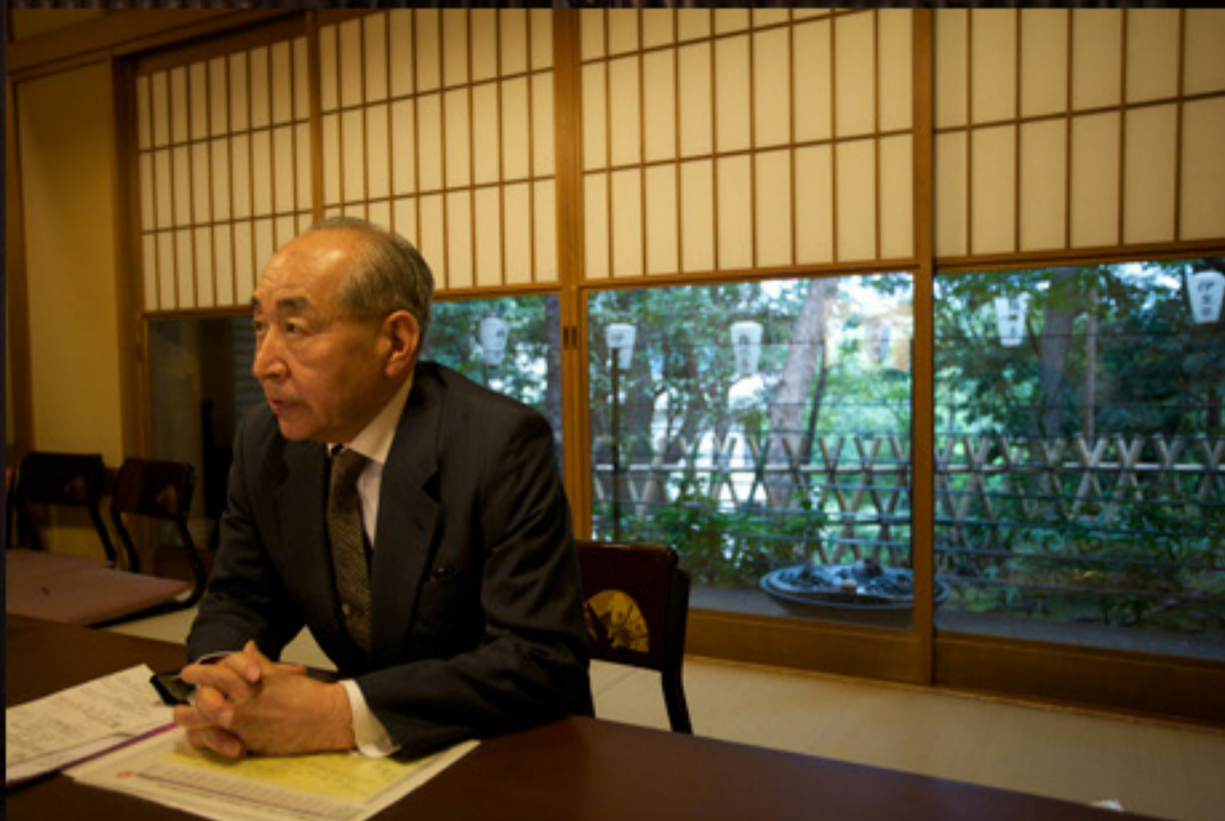


でも、公一先生は僕が中央大学を受けることを知ると、「なんだ、俺の後輩になるのか?」と言って、お茶の水の中央大学まで下見に連れて行こうと言ってくれたのです。公一先生も中央大学の法科のご出身ですからね。その日は、長男である隆治会長もご自宅にいたので、公一先生は「一緒に行こうか」と誘って、3人で出かけました。そのときのことは鮮明に覚えていますね。田舎から出てきて心細かったときに、言葉をかけてもらっただけでなく、実際に連れて行ってくれた。うれしかったですね。

隆治会長は2歳年下で、当時は慶應高校に入学したばかりだったかな。田舎者の僕からすると、とても洗練されていて格好よかった。入学試験が終わると、ふたりでお茶を飲みに行ったり、隆治会長の部屋で相撲をとったり、そんな思い出がありますよ。(2/11)

第8回 山岸秀豪佐野学園監事
受け継がれゆく創業の精神

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**公一先生は学校を興すために学ばれていた。
池之端での議論は深夜まで続きましたね。**

中央大学には合格することができて、僕は新宿区の下落合にあった学生寮に入りました。ここは母校である武生高校の卒業生の方々が創設した学生寮。育英会を設立して、東京で学ぶ学生たちを支援してくれていた。OBには政財界の大物もいましたが、みなさんととても気さくで、寮に来ては、「おい、飯を食べに行こう」と誘ってくれました。僕は学生委員長をしていましたから、会社で社長をされている大先輩に寄付をいただきに行ったこともあります。そんな諸先輩方の指導もあって、昭和31（1956）年、僕は明治生命に入社することになりました。



明治生命に入り、最初の2年間は丸の内本社の勤務でした。昭和36（1961）年には京都支店の彦根営業所長になりましたが、東京へはよく出張していました。東京の街では、昭和39（1964）年の東京オリンピックに向けて、ものすごい勢いで開発が行われていました。上野駅の駅前にある上車坂の佐野家も、上野の池之端に引っ越していました。出張のときは、会社でホテルを用意してくれるのだけど、公一先生に連絡をすると、「どうだ、家に来て泊まらないか？」とおっしゃる。ホテルをキャンセルし、池之端のご自宅に何うと、いつもは夜遅くまで出かけている公一先生がきちんと帰宅して待っていた。



それから延々と話をしました。終わるのは夜中の1時、2時。思えば学校を始めることを具体的に決めた時期で、公一先生は色々な構想を話してくれました。公一先生は、すでに事業家として成功を取っていたけれど、それはあくまで個人での仕事を中心だったから、大きな組織はあまりご存知なかった。一方で、学校を経営するとなると組織の運営ができなければならない。ですから、僕の勤めていた明治生命や三菱グループの様子などをお聞きになっていました。それと、松下やサントリーとか、関西のオーナー企業の経営についてよく質問されていました。

池之端の佐野家に泊まるのは、楽しみであり、一方では試験を受けているようでもありましたね。公一先生は鋭い人ですから、ごまかしがきかない。だから、ありのまましか通じない。意見を言わざるをえないときは、きちんと言う。それしかない。変に構えたりするのではなく正面からぶつかる。分からないときは、素直に分からないと言うしかない。

「公一塾」は僕にとって貴重な体験でしたね。(3/11)

第8回 山岸秀豪佐野学園監事
受け継がれゆく創業の精神

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**「語学をやることも、人づくりなんだ」
戦後の事業は学校のための資金づくりでした。**

公一先生ときく枝先生は、ずいぶん以前から学校を作りたいと考えておられたようです。僕自身、大学生の頃に公一先生から「将来は学校をやるんだ」と聞いたことがありました。日本は島国で、独りよがりの軍国主義で戦争を引き起こした。終戦後、東京の焼け野原で、「これからの若者が外国語を知らなければ日本の平和は築けない」と、おふたりは感じられていた。きく枝先生は、もともと先生だから、教育の大切さは痛感されていたと思います。

ただ、学校をやるには資金が必要です。資金を作らなきゃならない。借金するにしても、ある程度の資金がないとダメですよ。だから、終戦後から開学までの18年間は学校を作るための信念を持った資金づくりの日々だったと考えるのが自然でしょう。質素な暮らしをしながら、勤勉に働いておられた。

学校を始めたのは公一先生が58歳の時です。定年退職が55歳の時代でしたし、事業家としても十分に成功されていました。普通であればのんびり過ごそうという歳になって新しい事業を興された。それがすごい。信念がなければできないことです。

僕は明治生命で20年間にわたり法人専門の仕事をして、数多くの経営者と接してきましたが、公一先生は非常に先見の明がある方だった。世の中が求めるモノをいち早く察知し、事業として成功させてきた。ですから、語学教育という決断は商才に長けた公一先生の直感による部分も大きいと思います。



東京オリンピックの前の上野・池之端で、僕は東京に来るたびに公一先生と、深夜まで侃侃諤諤（かんかんがくがく）の議論を行っていました。組織での経営について質問をする公一先生に、生意気にも「組織を作っても、人を作らなければ意味がないですよ」と具申したことがある。すると、公一先生は、「人づくりなんだよ。語学をやることも、人づくりなんだよ」とおっしゃっていました。人づくりのための語学教育。それこそが、公一先生、きく枝先生が目指したものでした。

学校が開学する前、僕が池之端の公一塾に通っていた頃、隆治会長は家を出ていました。でも、公一先生の様子からは、ひとり息子に事業を継がせたいという気持ちがありありと伝わってきました。（4/11）

第8回 山岸秀豪 佐野学園監事
受け継がれゆく創業の精神

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**神田外語学院の創業者は
公一先生ときく枝先生のおふたりだった。**

昭和38（1963）年、セントラル米英語学院が設立されました。神田にあった予備校を買い取って、学校経営が始まったのです。僕は彦根にいたけれど、東京へ出張したときに、公一先生が学校を案内してくれました。公一先生は、「いずれ、新しいものを建てる。これは臨時だから、すぐに潰すんだ」と構想を語っておられました。翌年度には、学校名が神田外語学院に変更された。学校が軌道にのり、外で働いていた隆治会長も戻られて、事務局長として学校経営に参画されました。

今思えば、神田外語学院の創業者は、公一先生ときく枝先生のおふたりだったのでしょうか。公一先生はとても緻密に考えますが、実際に行うのは、きく枝先生。まさに女房であって、仕事上のパートナーでもある。ベターハーフであると思っていましたね。夫婦で共通の夢を持って、基礎を作ってきたから、後に公一先生がお亡くなりになられても、継続して取り組むことができた。それに、開学以来、実務面を仕切ってきたのは隆治会長だったから、公一先生なき後も母と子の二人三脚で学園を成長させることができたのです。

昭和39（1964）年、僕は東京勤務となり、池之端や銀座の所長を務めました。東京には5年ほどいて、昭和44（1969）年には福井支社に転勤となりました。この年、神田外語学院は、学校法人佐野学園となります。法人化にともない、僕は監事に就任した。公一先生からは、ずいぶん以前から『おまえは役員にしてやるから頼むぞ』と言われていました。



今思えば、監事という役職だったからこそ、これだけ長い間、佐野学園と関わり続けてこられたのでしょう。理事であれば当事者ですから、また違う関係になる。監事は外部にしながら、理事長および理事の業務執行および財務、経理関係の適正化を監視する役目です。だから、時には嫌なことも言わなければならない。でも、それが僕と佐野学園、そして歴代の理事長とのよい距離感だったのかもしれない。

佐野公一先生と僕は相性がよかったんですね。田舎から出てきて、心細かったときに大学の下見に連れて行ってくれた温かさが僕の中にはずっとあった。怖いけれど非常に温かみのある人だった。優しさを感じることができたから、怒られてもまた平気でお付き合いができたのでしょう。(5/11)

第8回 山岸秀豪 佐野学園監事
受け継がれゆく創業の精神

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**買おうと思えばベンツでも買えます。
でも、学生の学費で高級車には乗れません。**

昭和51（1976）年に、神田外語学院は専修学校法による認可を受けました。この頃からの数年間が学生数のピークの時期です。例えば、昭和52（1977）年は、志願者約3,000名で合格者約2,600名。ずいぶんと落としてもったいないと思いましたよ（笑）。これで1学年だから2学年を合わせると5,000人前後になる。

入学式は日比谷公会堂で行われていました。専門学校が日比谷公会堂で入学式をやるなんて、とても驚きましたよ。この当時、僕は神戸支社に勤務していました。関西学院大学の近くに住んでいたのですが、学校の方に「東京には神田外語学院という学生が5,000人もいる語学学校があると聞いたのですが、本当ですか」と聞かれたこともあります。関西の学校関係者の間でも話題になるくらい神田外語は知名度が高かったのです。

それほど学生数が増えても、公一先生も、きく枝先生も質素な生活をされていました。無駄なお金は一切使わない。お金をとても大切に使う。それは隆治会長にも受け継がれていると、つくづく思いますね。これは見習わなきゃならいんだけど、なかなかうまくいかない。



池之端の家に泊らせていただいて、きく枝先生と一緒に理事長車で送ってもらったことがあります。きく枝先生が理事長をされていた頃だったかな。乗っていたのは、確か国産車で、タクシーに使われるクラスの自動車だった。僕は冗談半分で、「質素な車ですね」と言ったことがある。「もっといい車に乗られたらどうですか。交通事故が起きたら大変です」ともね。すると、きく枝先生はこうおっしゃいました。

「個人でも買おうと思えばベンツでも買えます。だけどね、私は学校の経営者であり、学院長です。学校は学生さんの大切な学費で成り立っています。親御さんたちには大変苦勞されて学費を払っていただいています。ですから、学校の責任者がお金で高級な車に乗るわけにはいかないのです」

僕は、「ああ、さすがだな」と感心しました。教育者であり、学校の経営者はこうあるべきだと痛感しました。(6/11)

第8回 山岸秀豪 佐野学園監事
受け継がれゆく創業の精神

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**大学を創立する財政的な不安はなかった。
どんな大学にするかが課題だった。**

昭和48（1973）年に僕は神戸支社に転勤となりました。この時期はずっと法人を対象とした仕事をしていました。明治生命という後ろ盾があることで、一流会社の社長や会長に会える。とても勉強になった。それに神戸はとてもおしゃれな街ですから。関西でも東京から来た人には合う街なんですよ。

公私ともに充実した日々を送っていた昭和51（1976）年頃、突然、公一先生ときく枝先生が神戸まで訪ねて来られました。そんなこと初めてだったからとても驚きましたね。こちらは仕事で大忙しだったのですが、公一先生には「夜は空ける」と言われました。仕事をキャンセルして、家族をみんな連れて、神戸に当時あったオリエンタルホテルに食事に行きました。

その旅がおふたりにとって単なる観光だったかは今でも分かりません。大学の創設の計画が固まった時期だと思いますね。僕に何かを強く認識させようとしたのかもしれない。

昭和53（1978）年、千葉県が幕張の埋め立て地の用途について教育関係者を集めて説明を行ったという話を聞きました。その夏、公一先生は幕張の埋め立て地を見に行き、「大学は、ここに決めるんだ」と言って、その場で体調を崩されて倒れた。救急車で運ばれて、10月18日にお亡くなりになりました。



大学を設立する構想は、学院が軌道に乗り始めて間もなくからあったと思います。昭和50年代に神田外語学院に多くの学生たちが入ってくれたことで、大学を設立するための財政的な基盤が整いました。監督官庁である文部省の審査のなかにも、財政基盤に関する項目はありました。自己資金をきちんと持っていなければ、大学を設立する認可は下りない。でも、これは問題がなかった。だから、監事としての私も財政的な心配はしていなかった。

それよりも、どんな大学にするかのほうが課題でした。それは公一先生もずっと真剣に考えていましたよ。そして初代学長は、小川芳男先生という、東京外国語大学の学長経験者であり、NHKの英語教育でも名が通っており、そして人格者でもあった方に決まった。きく枝先生も隆治会長も、当時は非常に苦勞されたと思います。小川先生が学長だからこそ、開学当初から優秀な先生方を招くことができ、すばらしい教育体制を作れたのです。(7/11)

第8回 山岸秀豪佐野学園監事
受け継がれゆく創業の精神

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



きく枝先生は、郷里を大切にし、人と人の縁を引き寄せる力を持っていた。

昭和53（1978）年、公一先生の跡を継いで佐野きく枝先生が第2代理事長に就任されました。きく枝先生は郷里を大切にされる方でした。福井県人会にもしょっちゅう顔を出しておられたし、経済的にも協力されていたようです。日頃の人付き合いを大切にされていたから、学園の運営でもずいぶんとその交流が生きましたよ。人と人の縁を引き寄せる力を持っていた方でしたね。

大学ができたとき、平泉渉先生に学外の理事になっていただきました。平泉先生は、福井県出身の代議士で大臣まで経験された方。もともとは外交官でしたから、外国語大学としてはとても有り難かった。神田外語大学の3代目学長である石井米雄先生も平泉先生からのご縁です。福井という郷里を大切にされたきく枝先生の生き方は、佐野学園の発展にも広がったと思いますね。

きく枝先生は、学校経営の実務は隆治会長に任されて、ご自分は国際関係や女性教育に力を入れていらっしゃいました。なかでも思い出深いのが、『金色夜叉』です。きく枝先生は、尾崎紅葉の小説をもとにシナリオを書かれました。その劇を外国人教員たちが日本語で演じたのです。この劇で老人ホームを慰問したり、海外でも上演しました。きく枝先生は、そんなユニークな教育をしながら、人と人のつながりを作っていましたね。





神田外語学院の本館には貴賓室という応接室がありますが、ここで記念すべき第1回の大学の理事会が開かれました。佐野学園は大学を創設し、企業で言えば上場企業のランクになった。だから、理事会もただ判子を押すだけでなく、きちんと議論し議決する。議事録も採る。大学は国から補助金をもらいます。貴重な税金です。だからこそ、社会的な責任があるのです。理事会では、開会の宣言をきく枝先生がされて、議事進行は副理事長であった隆治会長が行った。大学ができて、初めての理事会。とても感慨深かったです。

そのときから、貴賓室の壁には女性を描いた絵がかかっていました。生前、きく枝先生は「これは私が贅沢をさせていただいた唯一のものなの」とおっしゃっていました。その一言を覚えています。ヨーロッパに公一先生と行かれたときに、買っていただいたそうです。よほど気に入られたんでしょう。この絵は、公一先生からきく枝先生への唯一の贈り物なのです。(8/11)

第8回 山岸秀豪 佐野学園監事
受け継がれゆく創業の精神

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



「お前、学校を本気でやる気だったら、その家は止める」と公一先生は言った。

生前、公一先生は、隆治会長に対して厳しかった。とりわけ、学院が始まってからの数年間はすごかった。人前であっても、何か悪いと思うと構わず怒った。「百獣の王であるライオンは、千尋の谷に我が子を突き落として、這い上がって来た子だけを育てる」と言いますが、まさにそのものだった。

公一先生からは、「後継者を育てたい」という想いがひしひしと伝わってきましたよ。また、隆治会長ご自身も自活して、起業の大変さを経験していたからこそ、公一先生の厳しい指導によって成長されたのでしょう。その後、隆治会長は、25年間あまり理事長をやられて、佐野学園の基礎をしっかりとお創りになった。それは、あの時期の公一先生の厳しさがあったからこそだと、僕は思います。

印象に残っていることがあります。隆治会長は、大学時代から家を出て、20代は自活をされていました。昭和38（1963）年、セントラル米英語学院の開学後に、佐野家に戻るのだけれど、そのときには世田谷区に家を建てる計画があった。30歳前後で、世田谷に家を建てる資金を作れるなんて、それもすごいけれどね。実は、建前まで決まっていたようです。でも、公一先生はそれに待ったをかけた。





「お前、学校を本気でやる気だったら、その家は止める」と公一先生はおっしゃった。法人の最高責任者は何かあったとき、直ちに本部へ駆けつけなければならない。いざというときは、歩いてでも通えなければならない、と。だから、経営者の家は、それぐらい近いところになければならない、というのが公一先生の考えでした。隆治会長は、素直に公一先生の言うことを聞いて、世田谷の家はすっぱりと諦めた。大英断です。すごく立派だと思いました。

隆治会長は、確かに公一先生とは性格的に合わなかった面もあったかもしれません。でも、会長は、公一先生、そしてきく枝先生の創業の精神というものをよく理解していると思う。最近、隆治会長が公一先生に驚くほど似てきた。顔から、考え方までそっくりなときがある。僕はよく、「ますます似てきたよ」と冷やかしている。本人は、複雑な顔をしますけどね（笑）。（9/11）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第8回 山岸秀豪佐野学園監事
受け継がれゆく創業の精神



「熟慮断行」
佐野隆治を表現する言葉はそれに尽きる。

トップの経営者には先見の明がなければならない。公一先生も、隆治会長も、そういう先見の明がある。だからおふたりの事業には、20年ぐらい先になって社会が理解できるようになったものもある。だけど、経営者はその「読み」を間違えると大変なことになる。佐野学園であれば、1,000名ぐらいの教職員がいて、家族を合わせると3,000名ぐらいになり、学生も合わせると8,000名ぐらいの人々が関わっている。経営者は、その全員に対して経営責任がある。

だから、経営者は孤独です。隆治会長は、いつも孤独で、「熟慮断行」をされていた。カリスマ創業者であった公一先生、そして、その共同創業者であるきく枝先生の時代は、経営を相談するパートナーがいた。でも隆治会長はずっと独りで考え、行動に移していったのです。時には1年、2年という時間をかけることもありましたが、愚痴ひとつ言わない。「熟慮断行」。経営者、佐野隆治を表現する言葉はそれに尽きます。

プリティッシュヒルズにしても、ご自分の会社を設立されて、自身の資産を投資されて創られました。苦悩されて、決断した。その代わり徹底的に本物にこだわって、文化財的な価値にまで押し上げた。バブル期、日本全国にテーマパークが出来たけれど、ことごとくつぶれた。中途半端なものだったら、残っていませんよ。そして、その文化財を佐野学園の裾野を広げ、ファンを増やすための宣伝媒体として活用する。文化への造詣が深かった神田外語大学の石井米雄学長が、公の場でも、プライベートでも、「プリティッシュヒルズは我が大学にとって必要なものです」と強くおっしゃっていたのが印象的でした。





もうひとつ佐野隆治という経営者のすごいのは、「俺はついてたよ」と言うことです。誰だって、自分がやってきたことで成果が挙げれば、自分がやったからだと言いたくなるものですね。でも、隆治会長は決してそう言わない。「俺はついてたよ」と言うだけです。確かに経営者には運のない人もいます。でも、それ以上に経営者には「徳」が必要であると思う。その徳は、親から受け継いだものであり、自分の努力によって手に入れるものかもしれない。隆治会長は、その徳を持っている方だと思うし、我々はそういう経営者のもとで働けることを誇りに感じてよいと思います。(10/11)。

第8回 山岸秀豪 佐野学園監事
受け継がれゆく創業の精神

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**求められているのはイノベーション。
10年先を目指し、学園の価値を高めてほしい。**

神田外語グループは、間もなく創立50周年を迎えます。100年を目指して、さらなる50年を歩んで欲しいと思いますが、そのためにはこの10年が勝負であると思います。世界はものすごいスピードで変化しています。だから、経営者は今以上に、先見の明が求められる。まず、10年先をどうするか。大学を例に挙げれば、単科大学としての存在価値を考えなければなりません。

経済の世界であれば、大手企業であっても、事業の合併は当たり前に行われています。保険や銀行では、旧財閥の明治（三菱）と安田、三井と住友が合併している。学校だって例外ではないし、現に関西では、国立大学の例ではあるけれど、大阪外国語大学が大阪大学に統合されました。

神田外語が生き残るには、どのようにオンリーワンとしての価値を高めるかにかかっています。合併するにしても、神田外語が中心にいないはいけません。小学校で英語が義務教育となったとき、その10年先には英語を話せるのが当たり前の時代が来るかもしれない。外国語大学の存在価値は、現在とは変わっているはずです。





求められているのはイノベーションです。これまでの学校では教育力や財務力が重要でしたが、これからは従来の型にはまらない改革と進歩が必要です。働く人々も常に危機感を持っていなければなりません。働く者すべてが佐野学園の価値を見極め、そして高めていく。10年先に目標を設定して、それに向かっていく。10年先を視野にした指導を行い、仕事をしていく。「どうせ、私はそのときにはいないだろう」ではいけません。人間には寿命があります。しかし、組織はもっと長く生きることができる。期限はありません。エンドレスの発展を実現できるかどうかは、今にかかっているのです。(11/11)

山岸 秀豪 (やまぎし しゅうこう)

昭和6 (1931) 年、福井県鯖江市生まれ。昭和31 (1956) 年、中央大学法学部を卒業後、明治生命保険相互会社に入社。昭和44 (1969) 年に学校法人佐野学園の監事に就任。当時からの唯一の役員。明治生命では法人顧客の開拓に手腕を発揮し、関西地区の要職を歴任。平成4 (1992) 年に同社の関連会社の取締役を退職。その後、故郷・鯖江に拠点を移し、佐野学園監事を続けながら、趣味である庭園づくりにいそしむ。福井ブランド大使も務める。